

◆パートナー(五十音順・敬称略)

〈寄付・助成金等〉

アサヒブリック(株)/アメリカン・エクスプレス・インターナショナル・インコーポレイテッド/
いちよし証券(株)/エア・リキード財団/㈱エイベックスインターナショナル/エーツーケア(株)/エ
ドワーズライフサイエンス(株)/(公財)大阪コミュニティ財団/㈱大塚商会/
㈱グリーンディングライフ/(一財)ザ・ブラフ・クリニック/(特活)ジャパン・プラットフォーム/
住信SBIネット銀行(株)/ソフトバンク(株)/ツヴィリングJ.A.ヘンケルスジャパン(株)/
(公財)テルモ生命科学芸術財団/日蓮宗あんのん基金/日本労働組合総連合会/
㈱バリューストックス/BNPパリバ証券(株)/ファイザー(株)/ヤフー(株)/楽天銀行(株)/リンベル(株)

※紙面の都合上、金額・継続期間等の基準による抜粋とさせていただきます。

2018年度にご寄付をいただきましたすべての法人・企業の皆さまに対し、改めてお礼申し上げます。

〈物品サービス〉

エクスクムグローバル(株)/㈱農心ジャパン/ブジョー・シトロエン・ジャパン(株)

〈イベント協力〉

ヴァローナ ジャパン(株)/LMVHモエ ヘネシー・ルイ ヴィトン・ジャパン(株)/㈱CROWN/
グランドハイアット東京/シャネル(株)/パークハイアット東京/パカラ パシフィック(株)/
ハリウッド化粧品/FLOS Japan(株)/バロン・フィリップ・ド・ロスシルド・オリエン代表事務所/
ピエール ファーブル デルモ・コスメティック ジャパン(株)/フランス料理文化センター/
ポアレ ジャパン(株)/モーブッサンジャパン(株)/モダニティ(株)/リシュモンジャパン(株)

〈プロボノ〉

デロイトトーマツ コンサルティング(株)/ホワイと&ケース法律事務所

◆理事会(五十音順)

磯村 尚徳
犬塚 直史
大浦 紀彦
オースタン・ガエル(理事長)
川越 昌子
瀬古 篤子
ダヴィッド・パトリック
寺島 左和子
森川 すいめい
山田 信幸
與座 聰

外交評論家
株式会社Island Voice代表取締役
形成外科医
PMC株式会社代表取締役
看護師
株式会社ヴィジョン・エイ代表取締役
麻酔科医
形成外科医
精神科医
形成外科医
形成外科医

◆事務局(五十音順)※2019年3月時点

浅井 総一郎	ファンドレイジングマネージャー
安達 洋子	ファンドレイザー(ドナーリレーション)
石井 夕美	総務・経理マネージャー
石川 尚	広報マネージャー/証言活動担当
伊藤 馨恵	マーケティングアシスタント
荻野 祥子	プロジェクトオフィサー
具 貴香	プロジェクトオフィサー
熊澤 幸子	医療支援プロジェクト担当
畔柳 奈緒	事務局長
武石 晶子	ハウジングファースト東京プロジェクト担当
メシニャック・マジョリ	事務局長アシスタント/プロジェクトアシスタント
望田 優子	プロジェクトオフィサー
米田 祐子	支援事業マネージャー
ルドン 絢子	ファンドレイザー(企業パートナー担当)

世界の医療団 (認定NPO法人)

特定非営利活動法人メドゥサン・デュ・モンド ジャパン

Médecins du Monde Japan

〒106-0044 東京都港区東麻布2-6-10 麻布善波ビル2F
Azabu-Zenba Bldg. 2F, 2-6-10 Higashi-Azabu, Minato-ku, Tokyo
106-0044, Japan
Tel: +81-(0)3-3585-6436 Fax: +81-(0)3-3560-8073
E-mail: info@mdm.or.jp

www.mdm.or.jp



世界の医療団

2019年3月発行

2018年度 活動報告書



©Guillaume Pinon



©MdM Japan



©Kristof Vadino



©Quentin Top



©Arnaud Finistre



©Kazuo Koishi



©Kazuo Koishi

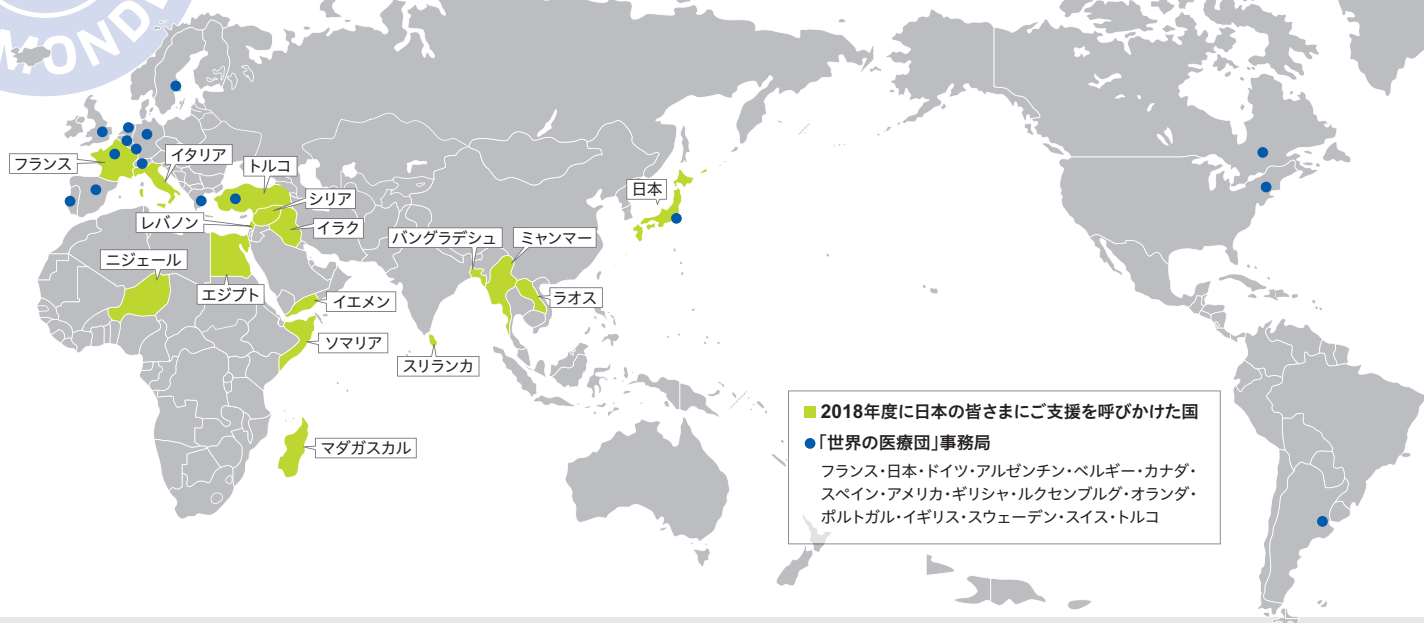


©Kazuo Koishi

「誰もが治療を受けられる未来を。」

“POUR UN MONDE OÙ CHACUN PEUT ÊTRE SOIGNÉ.”

世界の医療団の使命は「治療」と「証言」です。



支援者の皆さまへ

私たちが2012年から小児医療支援活動を行っているラオスは2018年夏、豪雨災害に見舞われました。世界の医療団が5歳未満児の健康を守る活動を継続している地域でも、突然襲ってきた自然災害により、数か所の村落で家屋が流出、活動対象医療施設もが長期停電による影響を受けました。そのうえ、近隣の医療施設が倒壊被害を受け、周辺の医療施設に患者が集中しました。緊急時にこそ機能すべき医療施設。平時の対応能力、平時からの備えから底上げていく必要性を改めて認識しました。現地保健当局などパートナーが大規模な自然災害対応を行った経験がない中で、世界の医療団は医療施設への発電機の入手や、被災村落への仮設トイレの設置、住民の感染症対策などに協力しました。こうした支援は、支援者のみなさまが緊急のお願いに快く応じてくださったことで実現しました。

支援活動における現地パートナーとの協働は、日本国内においても重要です。東日本大震災の翌年から活動を始めた福島そうそうプロジェクトでは、これまでの活動の蓄積が今後にわたって役立つように記録する取り組みを始めています。現地パートナーは、支援者であると同時に現地の生活者であることも多く、支援活動を真に持続可能なものとする上で果たす役割は大きいのです。このことも、皆さまにお伝えしたいことの一つです。

2018年に頂戴しましたすべてのご支援に対し、ここに改めて心より御礼を申し上げます。2019年もひとりでも多くの人へ医療を届けるため、活動にまい進してまいります。

世界の医療団 日本
理事長 ガエル・オスタン

【活動に関わる医療専門家の声】

看護師 木田晶子

私たちの支援はロヒンギヤとバングラデシュ人のコミュニティヘルスワーカーを通じて、ロヒンギヤの「ユース」(14歳から17歳)をヘルスプロモーターとして育成し、各々のコミュニティにおいて健康・防災教育活動を実施することによって、コミュニティ全体のレジリエンス(疾病や災害に打ち勝つ力)を高めることを目的としています。



©Kazuo Koishi 木田晶子

キャンプ内では、ユースを対象とした教育施設が十分でなく、ユースの大半は、日中は何もせず過ごしています。このような状況は、彼らに多大な精神的ストレスを与えるだけでなく、児童労働や誘拐、人身売買、児童婚といった危険にさらされる可能性も高く、キャンプ内では実際にそのような報告も多数挙がっています。私たちの健康・防災教育活動はこのような状況下にあるユースにとって、貴重な教育の機会となっているのです。実際に活動に参加しているユースからは、「新しい知識を得られるのが嬉しい」「学び得た知識をコミュニティの人々に伝えることができるのが嬉しい」といった声が聞かれています。

ユースは社会の未来を担う貴重な存在です。ユース一人ひとりが私たちの活動を通じて、健康や防災に関する知識やスキルを身につけるということは、彼ら自身の生きる力につながり、さらにはロヒンギヤのコミュニティ全体の生きる力に寄与するのです。皆さまのあたたかいご支援のもとに、これらの活動が支えられていることに心から感謝しています。

ロヒンギャ難民

緊急支援

ミャンマーでは2016年ごろから、ミャンマー軍とイスラム教系少数民族ロヒンギャの武装組織の間の武力衝突が激しくなっています。翌2017年8月にはロヒンギャの武装組織がミャンマー軍を攻撃したことをきっかけに、軍が「テロリスト掃討」を名目として、ロヒンギャ族コミュニティへの大規模な攻撃を展開しました。これにより、武器を持たない人たちが例外なく巻き込まれました。

ロヒンギャの人たちは、暴力から逃れようとバングラデシュとの国境を越え始め、国境を接するコックスバザール南部の村落部に流入しました。それ以前から避難していた人も含めると、100万人を超えたとされています。

世界の医療団は同年秋、「スマイル作戦」を通じて以前からのパートナーであるバングラデシュの現地NGOと共に活動を始め、世界の医療団 日本も間もなく合流しました。

2018年4月末までの間、特に弱い立場におかれている妊産婦を始めとする女性や高齢者、子どもを対象に、看護師やコミュニティ・ヘルスワーカーが医療や健康の啓発活動を行い、体調を崩している人などを医療に結びつける活動をしました。コミュニティ・ヘルスワーカーには、ロヒンギャの言葉を理解する現地の若者を採用することで、支援が必要な人たちに寄り添うように努めました。

同年9月からは、4月までの活動で明らかになったニーズをもとに、支援対象者をコミュニティの住民全員に広げ、コミュニティ全体の健康状態の底上げや、災害時への対応力を高める活動を行いました。

〈ミャンマー〉

人間開発指数	(189か国中) 148位
5歳未満の乳幼児死亡率	(出生1,000人中) 50.8人
平均寿命	66.7歳
医師、看護師、助産師の数	(国民1万人あたり) 15人

★本プロジェクトはジャパンプラットフォームの助成を受けて実施しました。



©Amaud Finistre

ラオス

緊急支援(豪雨災害)

20年ぶりの豪雨に見舞われ、全土で13万世帯が被害を受けました。世界の医療団が「小児医療強化プロジェクト」を展開しているフアパン県も被災。河川が決壊し、川沿いにあった隣県の小病院が倒壊し、医療器具などが流されました。この影響で、フアパン県の地域医療拠点では、停電が続く中、周辺地域からも患者を受け入れるなど対応に追われました。こうした状況に早急に対応するため、世界の医療団では患者が集中する医療施設に小型発電機を緊急に導入し、家屋流出被害により仮設家屋生活者を出した村落に、健康教育や衛生用品配布など、県・郡保健局と協働で感染症対策アウトリーチ活動を行いました。また、被災村落で共同トイレ設置や水場の整備などに当たったほか、家屋・家財を失った人たちに当面の生活を乗り切るための衣類、食料類、毛布、農具などを配布しました。



©Mdm

長期支援(小児医療強化プロジェクト)

経済成長の恩恵を受けつつある東南アジアにおいても、依然として5歳未満児の死亡率が高いラオス。2017年から小児医療強化プロジェクトを行っている東北部のフアパン県は、同国でも特に貧しい地域の一つです。医療施設や人材など医療資源全般が限られる中、下痢や肺炎など本来なら医療で救える疾病が原因で亡くなるケースが依然として少なくありません。本プロジェクトでは、医療関係者への研修と、村民に対する健康知識の普及を二本柱に、限られた医療資源を最大限に活かし、それを必要とする子どもが医療サービスにアクセスできるよう取り組みを続けています。村民に対する健康教育では、村落健康普及委員会のボランティアが活躍しています。2018年には562人に対して研修を行いました。



©Mdm Japan

人間開発指数	(189か国中) 139位
5歳未満の乳幼児死亡率	(出生1,000人中) 63.9人
平均寿命	67.0歳
医師、看護師、助産師の数	(国民1万人あたり) 14.5人

★本プロジェクトは「日本NGO連携無償資金協力」の助成を受けて実施しました。

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2018(UNDP)
※5歳未満死亡率・医師、看護師、助産師の数 World Health Statistics 2018(WHO)

シリア Syria

緊急支援



©Olivier Papegnies

人間開発指数

(189か国中) 155位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 17.5人

平均寿命

71.0歳

医師、看護師、助産師の数

(国民1万人あたり) 1人

非武装の市民を標的とした、凄惨な暴力が続くシリア。住み慣れた土地を離れて難民となるか、戦禍から逃れるすべを持たずに命の保障もない日々を耐え忍ぶか―。人々はいずれの場合にも心休まらない暮らしを強いられています。本来は保護されるべきはずの医療施設も、攻撃のターゲットになっています。医療従事者ら関係者は、命の危険を常に感じながらも、かろうじて残る医療施設に限られた医薬品で、住民のケアに当たっています。世界の医療団は、地域の医療施設と現地パートナーを支援する形で、イドリブ、アレッポなどで包括的なプライマリヘルスケアを提供し、国内避難民や現地住民を対象にさまざまな医療サービスを提供しています。

レバノン Lebanon

緊急支援



©Guillaume Pinon



©Guillaume Pinon

人間開発指数

(189か国中) 80位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 8.1人

平均寿命

79.8歳

医師、看護師、助産師の数

(国民1万人あたり) 49.4人

シリアを逃れた難民が大量に流入し、レバノンの医療システムを圧迫しつつあります。同国の公的医療サービスは、難民の流入前から十分な状態だったとは言えず、難民にとって医療はより遠い存在です。レバノンでの活動は、現地支援団体や組織と協働して医療制度の体制強化を図ることで、シリア難民だけでなくレバノンの社会的弱者の人たちも医療へアクセスできることを目指しています。医療施設では一般診療のほかセクシュアル・リプロダクティブヘルスサービス(産前・産後ケア、家族計画)と、性暴力や性差別を防止する取り組みと共に、被害者へのケアも提供しています。また、医療技術力向上を図るための医療者向けトレーニングも実施しています。

ソマリア Somalia

長期支援

20年におよぶ紛争が続くソマリア。エチオピアからの移民の通り道でもあり、混乱の中に生きる人たちの健康は長い間、著しく脅かされています。ソマリアで妊娠・出産に際して命を落とす女性は10万人中732人に上り、世界でも最悪の水準です。特に、出産に際し何らかの医療の力を借りられるのは女性の3分の1にとどまり、自宅を出産する女性は半数に上ります。家族計画についての理解も進んでいません。世界の医療団は2011年からソマリア北部のボサソにおいて、プライマリヘルスケアと性・リプロダクティブヘルスの両面において支援を行っているほか、栄養状態が悪化した2017年からは移動クリニックを通じて住民の健康を守っています。



©Lea Gibert

人間開発指数

(189か国中) ―

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 132.5人

平均寿命

56.7歳

医師、看護師、助産師の数

(国民1万人あたり) ―

イエメン Yemen

緊急支援

2015年ごろから紛争が激化しているイエメンでは、国民の8割に相当する2400万人が何らかの人道支援が必要な状態です(2019年2月時点)。紛争が激化する前から崩壊状態にあった同国の医療システムは、今やその半数が破壊されていると言われています。世界の医療団は2015年から、イエメン北部の首都サマヤやイッブなどで、現地の医療・保健施設を支援しています。ワクチンの接種や産前産後の健診、こころのケアを行っているほか、特に緊急性の高いケースに即応できる態勢づくりに努めています。また、2018年5月にはコレラの新たな流行が確認されたことから、世界の医療団は現地のほかのパートナーと協力してさらなる流行のまん延防止のための活動に当たっています。



©MdMF



©MdMF

人間開発指数

(189か国中) 178位

5歳未満の乳幼児死亡率

(出生1,000人中) 55.3人

平均寿命

65.2歳

医師、看護師、助産師の数

(国民1万人あたり) 10.7人

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2018(UNDP)

※5歳未満死亡率・医師、看護師、助産師の数 World Health Statistics 2018(WHO)

Bangladesh / Myanma / Madagascar バングラデシュ、ミャンマー、マダガスカル

スマイル作戦

1989年の初ミッションから、丸30年を迎えるスマイル作戦。口唇口蓋裂など生まれつきの奇形や、戦争や事故などによって機能障害を持つ人に対し、無償で形成外科手術を提供してきました。奇形のある外見のために差別されてきた人も少なくなく、手術によって症状だけでなくQOLも大きく改善できる余地のある、文字通り笑顔を取り戻す力のあるミッションです。形成外科治療のニーズが高い発展途上国はたくさんありますが、もとより資源が限られた医療機関ではいかに限る治療に比べて優先度が低く、結果として治療を受けられる機会のごく限られています。また、高額な医療費を負担できる人もまれです。こうした背景から、手術は貧困層を対象に無償とし、日本人形成外科医師が現地医療スタッフと共に手術に臨みます。日本人医師は、時に勉強熱心な現地の医療スタッフに時に質問責めにされながら、技術を伝えています。

◆ミャンマー

【回数】2回
【期間】7月16日～7月22日、
12月2日～12月8日
【手術件数】63件
【派遣ボランティア】延べ11人

◆バングラデシュ

【回数】1回
【期間】3月7日～3月14日
【手術件数】29件
【派遣ボランティア】5人

◆マダガスカル

【回数】1回
【期間】8月5日～8月11日
【手術件数】33件
【派遣ボランティア】2人



©Kazuo Koishi

◆2018年医療従事者派遣実績

海外支援活動には、医師10名（阿久津麗華、岡田朋子、江口智明、古賀康史、小松郁子、田村聡、橋本裕美子、森岡大地、山田信幸、與座總）、看護師5名（石原恵、稲垣安沙、辻之内幸恵、原田昌子、宮永樹里）が参加しました。

〈ミャンマー〉

人間開発指数
(189か国中) 148位
5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 50.8人
平均寿命 66.7歳
医師、看護師、助産師の数
(国民1万人あたり) 15人

〈バングラデシュ〉

人間開発指数
(189か国中) 136位
5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 34.2人
平均寿命 72.8歳
医師、看護師、助産師の数
(国民1万人あたり) 7.4人

〈マダガスカル〉

人間開発指数
(189か国中) 161位
5歳未満の乳幼児死亡率
(出生1,000人中) 46.4人
平均寿命 66.3歳
医師、看護師、助産師の数
(国民1万人あたり) 3.6人

日本Japan

福島こころのケアプロジェクト

2011年の震災と東電福島第一原子力発電所の事故以来、福島県沿岸部では、終わりの見えない災害の影響からトラウマやストレスを負い、度重なる避難と移転、それに伴う家族形態や地域社会の変化によって、生活基盤だけでなくこころの拠り所を失ってしまった人たちがいます。世界の医療団は地域に根ざしたパートナー団体と協働して、相馬市、南相馬市、浪江町、飯館村、川内村、富岡町、いわき市に精神科医や看護師、臨床心理士などを派遣してこころのケア活動を展開し、現地の精神科保健医療福祉の基盤を回復させるための支援を続けています。双葉地区で避難指示が解除された状況を受け、2018年は活動地域を富岡町にも広げました。また、帰還が始まった地域や今後起こりうる災害復興の現場で広く共有すべくこれまでのこころのケアの経験と教訓を冊子にまとめました。政府が震災後10年を一区切りと定めて復興支援を行っていることに鑑み、今後も増大していくこころのケアのニーズに持続可能な形で応じることのできる体制や仕組みづくりを模索しています。



©Kazuo Koishi

★本プロジェクトはジャパンプラットフォームの助成を受けて実施しました。

ハウジングファースト東京プロジェクト (ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト)

「ハウジングファースト」とは、まず安心できる住まいを確保することから支援を始めるという考えです。東京・池袋周辺地域で「障がいがあっても安心して地域で暮らす」ことを目指して2010年に始まった活動は、現在7団体協働のコンソーシアムへと成長し、各団体それぞれの専門性を活かして、ホームレス状態の方たちのニーズに応える包括的な継続支援（医療、住まい、生活のサポート、仕事作り、居場所作り等）を行える体制が整いつつあります。月2回行われる炊き出しでは、医療相談会が医療機関の代替になるのではなく、路上生活から脱し安心した住まいを得るためのきっかけ作りの場、いわば入口の役割と考え活動しています。診療に携わるボランティアがその意識を共有することにより、また医療者からの「通院が必要ではないか？」といったアドバイスをきっかけに、生活福祉相談に繋がるケースが増えています。相談者ご本人にとって何が最善か一緒に考えながら活動しています。



©Kazuo Koishi

人間開発指数 (189か国中) 19位
5歳未満の乳幼児死亡率 (出生1,000人中) 2.7人
平均寿命 83.9歳
医師、看護師、助産師の数 (国民1万人あたり) 136人

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2018(UNDP)
※5歳未満死亡率・医師、看護師、助産師の数 World Health Statistics 2018(WHO)

証言活動

証言担当者が現場に入る機会を増やし、現地からの発信活動を行ったほか、またMdMだからこそできる証言活動を進めました。

昨年の西日本を襲った豪雨災害時、災害看護の経験を持つ看護師監修のもと「感染症を防ぐために」を作成しました。また、被災された方々に心労を忘れる時間が少しでももたられることをと考え、これまでの災害医療支援現場においてお配りした、避難所生活などでのストレス軽減のために作成した「共同生活をする時のところがすこし楽になるコツ」、「眠りのコツ」についても情報提供を行いました。

シリアの和平解決に向けた人道支援再開、軍事行動の停止などを訴える声明と写真キャンペーンを世界各地で同時に行ったほか、デニ・ムクウェゲ医師のノーベル平和賞の受賞にも、世界の医療団ベルギーの協力を得てコンゴ民主共和国バンジ病院の活動とともに氏の功績について発信を行ってきました。また年間を通してブランディング・キャンペーンを実施、「あきらめの悪い医療団」をコピーに「MdMの医療とは」をボランティアを通して伝えてきました。

ロヒンギャ難民コミュニティ支援プロジェクトにおいては、新事業のスタートに伴い、プレスリリース等の広報活動をおこなったほか、年間を通じて積極的に証言活動を行いました。フリーライターの望月優大氏に協力を仰ぎ、証言プロジェクトを実施、ミャンマー側で今も残るロヒンギャの人々、大量流出が起きる2017年8月までラカイン州で起きていたことを伝えることに焦点をあて7月には証言イベントを開催しました。11月には証言担当者とカメラマンが渡航、キャンプにて取材活動を行いました。ひとりひとりのロヒンギャにスポットをあて、彼らのストーリーを語ってもらい伝える「ロヒンギャの証言」をホームページ上で連載しています。

国内プロジェクトについては、直面するさまざまな課題について発信することに努めました。生活保護法改正に伴う生活保護受給者へのジェネリック薬使用の選択権について、西岡医師とともに発信活動を行いました。最初の発信から政策提言活動に発展、「いのちのとりで裁判全国アクション」「日弁連」などと共同で厚労省にて申し入れを行いました。また2017年12月に発行した提言書「福島のことろ」について、2月に復興庁にて記者懇談会、プレスリリースを発表、ジャパン・プラットフォームとの共催で復興庁にて開催、ふくしまのことろのケアに関する提言活動を行いました。

話すことからつながり、始まっていく、すべての現場の活動に共通するMdMらしさを文字や画に変えて伝えてきました。



©Kazuo Koishi



©MdM Japan

キャンペーン

◎あきらめの悪い医療団

社会から、医療から、教育から、当たり前の前何かから置き去りにされている人がいます。そのような人たちの状況を変える、心身の傷を癒す、そのどちらも今すぐできることではないけれど、今日も世界のどこかで、あきらめ悪いボランティアがパートナー、市民のみなさんと活動に取り組んでいる、というボランティアの姿を伝える広報キャンペーンを行いました。

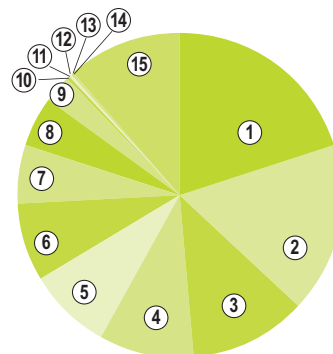


2018年度決算

世界の医療団は、1名の監事による会計及び業務の内部監査と、外部の独立した公認会計士による会計監査を毎年度受けています。

収入(単位:日本円)	208,434,000	支出(単位:日本円)	233,015,196
寄付	128,267,159	プロジェクト費(医療支援+証言活動)	194,040,067
助成金	79,093,622	募金事業	33,306,811
収益事業	811,718	商標権使用料等事業	816,781
謝礼 ほか	36,501	管理費	4,851,537
会費	225,000		

◎プロジェクト費内訳



①ラオス／小児医療強化プロジェクト	20.0%
②ロヒンギャ緊急医療支援プロジェクト	17.0%
③シリア／緊急医療支援プロジェクト	11.7%
④ヨーロッパ難民支援プロジェクト	9.6%
⑤東日本大震災被災地支援プロジェクト	8.1%
⑥ハウジングファースト東京プロジェクト	7.8%
⑦スマイル作戦	5.8%
⑧イエメン／栄養危機緊急支援プロジェクト	5.2%
⑨レバノン／シリア難民母子保健プロジェクト	2.6%
⑩ラオス／小児医療強化プロジェクト 緊急豪雨被害支援プロジェクト	0.3%
⑪ソマリア／妊産婦と乳幼児の診療	0.2%
⑫ソマリア／プライマリーヘルスケア、母子保健プロジェクト	0.2%
⑬スリランカ／医療支援事業準備	0.1%
⑭ニジェール／母子保健プロジェクト	0.1%
⑮証言活動*	11.3%

*ニュースレター発行、MdMの活動紹介イベント、写真展など開催、NGOイベントへの参加等

世界の医療団は「認定NPO法人」として東京都より認定されています。
世界の医療団へのご寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。

アドボカシー

- 2018年2月：東日本大震災被災地支援 提言書「福島のことろ」を発行
- 2018年3月：生活保護受給者に対する後発医薬品（ジェネリック）の使用を原則化する法案の撤回を求める提議
- 2018年7月：高桑看護師監修、感染症対策啓発チラシを制作